

コンブがつなぐ世界

— 近現代東北アジアのコンブ業小史¹

The Region Unified by Kelp : A Short History of Kelp Industries in Northeast Asia

神 長 英 輔*

要旨

古代から現代まで東北アジアの人々は好んでコンブ（マコンブとその近縁種）を食べている。20世紀以降はコンブを原料とするアルギン酸が世界中で多用途に用いられるようになった。世界最大のコンブ消費地は中国である。しかし、コンブは中国沿岸で自生していなかった。古代から20世紀半ばまで中国はコンブをもっぱら周辺地域からの輸入に頼っていた。このコンブ貿易は19世紀半ばに拡大した。19世紀から20世紀半ばまでの輸入品の大部分は日本産だったが、19世紀の末には沿海州やサハリン島などのロシア極東産のコンブも一定の地歩を占めていた。こうした状況が一変したのが1950年代である。藻類学者の曾呈奎が開発した養殖技術によって中国はコンブの完全自給を達成した。現在の中国は年間約300万トンのコンブを生産する世界最大のコンブ生産国であり、世界第2位の海藻生産国である。こうして古代から続いてきたコンブ貿易の道は廢れた。

キーワード：東北アジア近現代史、ロシア極東近現代史、コンブ（昆布）、中国近現代史、水産業

はじめに

私の専門は近現代のロシア極東史と日露関係史です。最近では東北アジア近現代史とも称しています。私はロシア極東と日本の関係の歴史を調べていくうちにコンブ業に行きあたりました。コンブ業の歴史を調べていくうちに話は東北アジア全体に広がりました。東北アジア近現代史専攻と名のようになったのはこういう次第です。

東北アジアの人々はコンブを好んで食べます。中華世界、朝鮮半島、日本列島、ロシア極東はコンブ食の地域です。モンゴルについては残念ながら調べられていません。

ただし、コンブは食用以外にも多用途で使われています。日本産のマコンブという種に限れば、たしかにその多くは食用として消費されています。しかし、コンブ科の他の種に目をやるならば、食用以外に世界中で広く使われていることがわかります²。

世界を見わたせば、コンブ科の植物は食用よりも、工業用に広く使われています。例えば、コンブからはアルギン酸という粘度の高い酸が作られます。アルギン酸は増粘剤としてパンやうどん、アイスクリームなどの食品に添加されています。このほか、アルギン酸は医療用のゲル状素材としても使われます。印刷や繊維の染色でも使われます。製紙工業においては糊料やコーティ

* Kaminaga, Eisuke [国際文化学科]

ング剤としても使われます³。みなさんがふだん使っているシャンプーにも入っています。化粧品
の乳液やクリームにも入っています⁴。

コンブはこのように多用途に使われています。そして東北アジアのほとんどの人が食べたこと
があり、また、日常的に食べている食品です。コンブは今日ここにお集まりいただいたみなさん
と深い縁があるのです。さらに、東北アジアのコンブ業の歴史はこのシンポジウムのテーマであ
る格差や差別の問題にも深く関わっています。それは今日ここでコンブについてお話しする理由
のひとつでもあります。

1. 日本列島から中華世界へ

コンブは中国語で「海帯 (haidai)」といいます。韓国語では「다시마 (tashima)」、ロシア語
では「морская капуста (morskaiia kapusta, 海のキャベツ)」といいます。日本語のコンブ (昆
布) の語源はアイヌ語起源と言われていますが、諸説があります。

東北アジアにおいてコンブは日本列島や朝鮮半島から中国へ輸出されてきました。これは古代
から 20 世紀半ばまで続きます。この貿易の道は第二次大戦後に途切れます。1950 年代の中国で
コンブ革命とも呼ぶべき技術革新が起こったためです。コンブ革命ということばは私の造語で
す。大きな出来事にもかかわらず、日本ではよく知られていないのでこの場でご紹介したいと思
います。

かつての中国沿岸ではコンブがまったく採れません。中国でほとんど採れなかったにも
かかわらず、古くから広く食べられていたのです⁵。中国で食べられていたコンブは、日本列島
や朝鮮半島、現在のロシア極東の沿海州など中国の周辺地域で採られたものでした。中国と日本
とのコンブ貿易は 5 世紀ごろから始まったと言われてます⁶。

このコンブの貿易量が増えてくるのは 18 世紀後半、日本でいえば江戸時代の半ばです⁷。日本
の開国前後にコンブ貿易はさらに拡大します。

この時期のコンブ貿易の道はおもに 2 つです。コンブはまず産地である蝦夷地から大坂に運ば
れます。日本海ぞいに新潟などを經由する北前船の道です。大坂から道は二つに分かれます。ひ
とつめが大坂から長崎を經由して広州に行くものです⁸。もうひとつは大坂から薩摩と琉球を
經由して福建方面に行くものです⁹。開国、そして明治以降になると、この道は大きく変わります。
上海の商人が箱館 (函館) に直接やってくると、函館から上海に直接運ばれるコンブが出てきま
す¹⁰。

日清・日中間のコンブの貿易量は 1885 年頃までが 1 万トン台、1890 年代には 2 万トン台、
1900 年代から 1930 年代が 2 万トン台後半から 3 万トン前後です¹¹。この 1 万トン、2 万トンと
いう数字は乾燥重量です。コンブは乾燥すると重さが約 5 分の 1 になります¹²。ご存じの通り、
乾物のコンブは軽いです。日本のスーパーマーケットで小売りされているコンブはひと袋でせい
ぜい数十から 100 グラム程度です。1 万トンといえは相当な量です。

20 世紀に入ると日中貿易は工業製品が中心となり、全体の規模も大きくなります。1910 年代、
とくに第一次大戦以降、日中貿易におけるコンブ貿易の比重は相対的に小さくなります。しかし、
それまでの数十年、コンブは重要な貿易商品でした。実際、明治の新政府は上海でコンブを売っ
て殖産興業のための外貨銀を稼いでいました¹³。

1930 年代から日中のコンブ貿易が激減し、戦後、この貿易はほぼ消滅します¹⁴。交戦してい
た戦中に減ることは当然としても、戦後に消滅したのはなぜでしょうか。理由はあとで改めてお

話します。

ここまでの話をまとめます。古代から第二次大戦までは日本から中国に大量のコンブが輸出されていました。近世にはコンブの道が二つありました。ひとつは長崎から輸出される道で、もうひとつは琉球経由でした。

2. ロシア極東から中華世界へ

明治維新の直前の1860年、ロシア帝国が日本海沿岸の地域（沿海州）を清から獲得します。そこに建設された港町がウラジオストクです。そのウラジオストクにはじめて住んだ民間人はシベリア商人のヤコフ・セミョーノフ（Семёнов, Я.Л., 1831-1913）という人物です。ウラジオストクはロシア帝国が建設した町ですが、それまで無人だったわけではなく、漢人がナマコやコンブを採り、先住民と毛皮を交易する場所でした。ユダヤ系のセミョーノフはロシア陸軍に穀物や馬を納入していた有名な商人で、後にはウラジオストクの初代の民間人市長を務めました¹⁵。セミョーノフは中国人にならい、すぐにウラジオストク周辺でコンブ業を始めます。さすがは名うての商人です。

沿海州ではすでに琿春（フンチュン）の商人が満洲人にコンブを採らせていました。現在の琿春は吉林省の延辺朝鮮族自治州の町です。地図で見ると、琿春とウラジオストクの近さがわかります。琿春の商人はウラジオストクから自前の船で琿春にコンブを運び、そこから内陸を経由して華北方面にコンブを輸出していました¹⁶。

一方、セミョーノフはウラジオストクから海路で中国本土をめざしました。当時のロシア極東沿岸は同時期の日本列島沿岸と同じで、さまざまな国籍の船が行きかう海域でした。セミョーノフはドイツ船を傭船してウラジオストクから山東省の煙台（当時の芝罘）にコンブを輸出しました¹⁷。

その後、セミョーノフは1878年からサハリン島でコンブの生産を始めます。セミョーノフ商会の労働者はおもに満洲人、漢人、朝鮮人でした。彼らはウラジオストクから船に乗せられ、サハリン島に行きました。サハリン島の流刑囚のロシア人を雇用することもありましたが¹⁸、労働力の大半は満洲人、漢人、朝鮮人でした。この時期、セミョーノフ商会はサハリン島と沿海州をあわせて年間で数千トンものコンブを生産していました¹⁹。

ここで問題にしたいのは、このシンポジウムの主題である格差と差別です。コンブの労働者のなかには債務奴隷と呼ぶべき人々がありました。満洲人のなかには、琿春の商人に借金漬けにされ、その借金をかたに労働させられていた人々が多くいたのです²⁰。朝鮮人のなかにもそうした人々がいた可能性があります。沿海州の朝鮮人はもともと朝鮮北部の出身です。彼らは1860年代に飢饉を逃れてロシア極東に逃亡してきた農民です。

日本でも事情は同じです。江戸時代の蝦夷地でコンブを採らされていたのはアイヌです。アイヌも和人の商人に債務奴隷化させられてコンブを採らされていました。19世紀の北蝦夷地（サハリン島）に至ってはニシン漁業の妨げになるとしてアイヌのコンブ採集自体が禁じられていました²¹。沿海州やサハリン島の先住民は古くからコンブを食べていましたから²²、これは暴挙です。

コンブのあるところ債務奴隷あり、これは地域を越えて東北アジアに共通する事態でした。これには構造的な原因があります。コンブは中国に輸出されていました。近代の中国でコンブを食べていたのは庶民です。19世紀から20世紀にかけて中国の農民は各地方の市場で物々交換に近い形でコンブを入手し、農閑期の秋から冬にかけて食べていました²³。農民たちが好んだコンブ

は厚さが薄いもので塩分の強いものでした。理由は、薄ければすぐに煮あがるので燃料が少なくてすむ、そして、塩分が強ければ調味料をなしでも食べられるということです²⁴。ここからは農民たちの苦しい生活が垣間見えます。それほど貧しい農民向けの商品である以上、コンブは価格が安くなければ売れません。債務奴隷のような労働で生産していたからこそ、農民たちが買えたわけです。コンブ生産に債務奴隷ありという東北アジア地域共通の事態は、国境を越えたコンブ業の全体の構造を踏まえると理解しやすくなります。

セミヨーノフ商会在生産したサハリン島産のコンブは、華北の市場で日本産コンブと競合していました。両者とも高品質で知られていました。日本の水産業史では「日本人は漁業や水産加工が上手だから、他国産の品質は日本産にまったく及ばなかった」と言う論者が多かったのですが、ここでは当てはまりません。これも先の講演で酒井直樹先生が指摘した、現代的なステレオタイプの思い込みが研究史に反映している例です。

日露戦争後、1905年のポーツマス講和条約でサハリン島南部は日本領になります。サハリン島におけるセミヨーノフ商会の事業は頓挫します。しかし、その後もロシア極東から中国へのコンブ輸出は続きます²⁵。

1930年代でもソ連極東から満洲へのコンブ輸出が確認できます。第1次・第2次五か年計画のソ連極東でもコンブが生産されていました²⁶。これはカリ塩やヨードなど工業原料の生産のためです²⁷。当時のソ連極東では中国に輸出するほか、国内需要のためにもコンブを生産していたのです²⁸。ただ、この輸出も1950年代に激減します²⁹。理由は中国で起こったコンブ革命です。

3. コンブ革命

中国に輸入されたコンブは中国国内でどのように動いていたのでしょうか。20世紀後半の中国は国内でコンブを自給するようになるので、ここでの話は20世紀前半の話です。

先ほど述べたように、第一次大戦前後は日本から年間約3万トンが輸入されていました。ロシア極東産のコンブは華北では健闘しているのですが、中国全体でいえば輸入コンブの9割が日本産でした。これらの大半はまず上海に陸揚げされますが、そのほとんどは上海を素通りして長江の流域へ移出されました³⁰。

コンブの多くは内陸部で食べられていたようです。例えば、四川、湖北、湖南、江西などです。コンブにはヨウ素が多く含まれています。内陸の人々は日常的に海藻類を食べないため、栄養素としてのヨウ素が不足しがちだと言われています。コンブが甲状腺の疾患に効くことと内陸でコンブが好まれていたことにはおそらく関係があるのでしょうか。

繰り返し述べてきたとおり、こうしたコンブ貿易の状況が激変したのは1950年代です。中国でコンブの養殖技術が開発され、1950年代から中国はコンブを自給するようになります。現在の中国は世界最大のコンブ生産国で、世界第2位の海藻生産国です（第1位は南米のチリ）³¹。中国で生産されているコンブのほぼ全量は国内消費向けです。6割は工業用で、残りが食用です³²。

この養殖技術を開発したのは曾呈奎博士（Ceng Cheng- Kui, C.K. Tseng, 1909-2005）です。博士は華南の廈門の生まれです。博士は留学して海藻研究の第一人者になったアメリカから1946年に帰国し、中国の海藻研究を生涯にわたって先導しました³³。博士の養殖技術によって、中国はコンブの完全自給を果たしました。これにより千年以上続いた日中のコンブ貿易が廃れました。私はこの技術革新をコンブ革命と呼んでいます。

曾博士が卓越していたのはその学際性です。博士は自分で海に潜って海藻の生態を調べ、陸では市場の調査や工場での製品開発にも携わりました。博士はコンブに関することすべてに精通していたのです³⁴。曾博士なくしてコンブ革命はありえなかったと断言できます。

博士のもともとの研究の動機は差別されていた漁民の生活を改善することでした³⁵。実際、沿岸部の漁民の生活水準はコンブ養殖によって向上しました³⁶。博士の志は大躍進政策でも文化大革命でも変わりませんでした。多くの知識人の例に違わず、博士も文革で迫害を受けますが、人民の生活を改善したことが評価され、命を落とすには至りませんでした³⁷。

コンブ革命では生産性の向上と生産量の増大が同時に実現されました。まず低温下での育苗と輸送の技術が開発されたことで生産量は大幅に増加しました。コンブの苗は水温が低くないと育ちません。そこで遼寧や山東などの北の海で集約的に育苗し、それを低温のまま南へ輸送し、浙江や福建、広東の海で苗は大きく育てられました。育成に際しても、波浪の影響を受けないような容器や養殖いかがが開発されました³⁸。次いで徹底した品種改良によって一つの株あたりの生産量が飛躍的に増大しました。

現代日本の多くの人々の考えでは、コンブは北の海に自生するものです。私もコンブ業を研究するまではそう思っていました。しかし、実際、現在の中国では南部の福建や広東、つまり沖縄と同緯度の海で大量のコンブが生産されているのです³⁹。

4. おわりに

古代からコンブを利用し、コンブの恩恵にあずかっているのに、現代の日本の私たちはコンブ業の歴史をまともに顧みることがありません。なぜ東北アジアの近現代史としてコンブ業の歴史が研究されてこなかったのか。いくつかの理由が考えられます。

まず、ナショナル・ヒストリーの枠組みという問題があります。もちろん従来の日本の歴史学にはコンブについての優れた研究が多くあります。しかし、そうした研究のほとんどは日本という枠組みを前提としています。だから、日本のコンブ生産について熟知した研究者が「最近では中国でもコンブを食べるようになった」と書いています。

次はコンブの生産地が辺境であるという問題です。国という枠組みを前提とするならば、コンブはどの国でも辺境で生産されていることになります。知識人の多くは国の中央部に位置する都市の住人であり、辺境の様相にはなかなか目を向けません。ロシア極東の場合でいえば、移民が生産の中核をなしていたこともあります。辺境で移民の手によって担われ、製品はほとんど輸出されてしまうわけですから、さらに関心が疎かになるわけです。

もうひとつはジェンダーの問題です。私は外国の研究者に「コンブを食べていますか」と聞いてまわっています。そうした際、女性の研究者はなかなか詳しく教えてくださるのですが、男性の研究者に聞くとあまりよくわからないという答えが返ってきます。男性の研究者の多くは料理をしない、つまり日常の食文化から自分を疎外しています。男性が多数を占めてきた歴史学の世界で研究者の関心がコンブに向けられる機会は必然的に乏しくなります。

先ほどお話をされた酒井直樹先生は以前、「ナショナル・ヒストリーを学び捨てる」という論文⁴⁰を書きました。私はその言葉を座右の銘としてコンブ業の研究をやっています。ナショナル・ヒストリーを学び捨てていくと、コンブ業の歴史の諸問題は理解しやすくなります。東北アジアのコンブ消費の中心は中華世界であり、ロシア極東や朝鮮半島、日本列島は周縁です。ナショナル・ヒストリーを捨て国境を相対化すると、そのことははっきりします。漁業における債務奴隷

や海民への差別が東北アジア共通であることも見えてきます。

つまり、東北アジアのコンブ業をよりよく理解するためにはナショナル・ヒストリーを学び捨てる必要があります。そして東北アジアのコンブ業を調べることで、さまざまなものを見落としてきたナショナル・ヒストリーの制度的な問題が具体的に見えてくる、つまりより普遍的な問題にもたどりつくことができるのです。

¹ 本論文は新潟国際情報大学 20 周年記念シンポジウム『21 世紀東アジア〈共生〉の条件』の「セッション 2 海=境界をこえる〈共生〉の試み」(2013 年 11 月 3 日)での発表(シンポジウムでの原題は「生活文化圏としての環日本海 近現代のコンブ業の歴史から考える」)をもとにしたものである。本紀要への掲載に際しては文章の一部を追加・削除・修正し、題名も改めた。

² 大野正夫編著『有用海藻誌』内田老鶴圃、2004 年、440-441 頁。

³ 大野『有用海藻誌』446-449 頁。

⁴ 大石圭一編『海藻の科学』朝倉書店、1993 年、189-190 頁。

⁵ 通説では 1920 年代まで中国沿岸でマコンブは生育していなかったとされるが、明治期の日本の調査には「山東でロシア極東産に匹敵する良質のコンブが採取された」という記述もある(山本由方『清国水産弁解 附:日清貿易事情』農商務省水産局、1886 年、82-83 頁)。

⁶ Frederick J. Simoons, *Food in China: A cultural and historical Inquiry* (Boca Raton, Florida: CRC Press), 1991, p.181.

⁷ 「大阪昆布仲買商組合沿革」大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済資料集成』6 巻、大阪商工会議所、1974 年、19 頁。

⁸ 大阪経済史料集成刊行委員会『大阪経済資料集成』20 頁。

⁹ 河原田盛美『清国輸出日本水産図説』農商務省水産局、1886 年、32-33 頁。

¹⁰ 「昆布其他輸入港調」町田実一『日清貿易参考表』1889 年(国立国会図書館近代デジタルライブラリー [http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/804396/4]17-22/67) (2012 年 6 月 30 日閲覧)。

¹¹ 島野隆夫『商品生産輸出入物量累年統計表』有恒書院、1980 年、105 頁。

¹² 楊 清閣、董 雅鳳、李 展榮ほか「コンブ生産における中国の動向と台湾市場—中国のコンブ養殖と台湾における流通・消費構造の素描」『農経論叢』64 巻、2009 年、50 頁。

¹³ 大蔵省『準備金始末』大蔵省、1890 年、147-157 頁。

¹⁴ 島野『商品生産輸出入物量累年統計表』105 頁。

¹⁵ Приморский край: краткий энциклопедический справочник. Владивосток, 1997. С. 432.

¹⁶ Высоков М.С. Комментарий к книге А.П. Чехова «Остров Сахалин». Владивосток, 2010. С. 626. (емёнов Я. Л. Сообщение о морской капусте // Владивосток: общественно-литературная и морская газета. №№ 47 и 48. 1885.)

¹⁷ Хисамутдинов А.А. Жизнь замечательных людей Владивостока. С. 279-280.

¹⁸ Ищенко М.И. Русские старожилы Сахалина: вторая половина XIX - начало XX вв. Южно-Сахалинск, 2007. С. 238.

¹⁹ Высоков. Комментарий к книге А.П. Чехова. С. 621-623. 神長英輔「コンブの道 サハリン島と中華世界」『ロシア史研究』88 号、2011 年、70 頁。

²⁰ Высоков. Комментарий к книге А.П. Чехова. С. 623-624.

²¹ 松浦武四郎著(秋葉実翻刻・編)『蝦夷訓蒙図彙・蝦夷山海名産図会』北海道出版・企画センター、1997 年、328 頁。

²² 佐々木史郎『北方から来た交易民: 絹と毛皮とサンタン人』日本放送出版協会、1996 年、36 頁。「北夷分界余話」間宮林蔵述、村上貞助編、洞富雄・谷沢尚一編注『東鞆地方紀行』(東洋文庫)、平凡社、1988 年、82 頁。

²³ Высоков. Комментарий к книге А.П. Чехова. С. 628. 「清人昆布料理法」『殖民公報』第 64 号、1912 年、88 頁。神長「コンブの道」74 頁。

²⁴ 東京高等商業学校編『北海道輸出昆布調査報告書・支那輸出羊毛調査報告書』東京高等商業学校、1906 年、88-91 頁。

²⁵ 神長「コンブの道」75 頁。

²⁶ Мандрик А.Т. История рыбной промышленности Дальнего Востока. 1927-1940 гг. Владивосток, 1996. С. 56.

²⁷ Кизеветтер И.В., Суховеева М.В., Шмелькова Л.П. Под общей ред. Кизеветтера И.В. Промысловые морские водоросли и травы дальневосточных морей. М., 1981. С. 4.

- ²⁸ Гайл. Освоение растительных богатств дальневосточных морей. РГАЭ (Российский Государственный Экономический Архив) . ф.410. оп.2. д.1196. л.12-15. (Документы РГАЭ по теме «Природные ресурсы и экономическое развитие Дальнего Востока, о. Сахалина и Камчатки, 1917-1970-е гг». Токио. «Наука», 1996.)
- ²⁹ Внешняя торговля СССР за 1955-1959. М. 1959. С.490-491. Внешняя торговля СССР за 1962. М. 1962. С.187.
- ³⁰ 神長英輔「コンブの旅とコンブ革命」谷垣真理子他編『変容する華南と華人ネットワークの現在』風響社、2014年、126-128頁。
- ³¹ 2009 FAO Yearbook. Fishery and Aquaculture Statistics. Capture production. p.15. [http://www.fao.org/docrep/015/ba0058t/ba0058t.pdf] (2012年6月27日閲覧)。
- ³² 江南「中国昆布養殖業の展開と経営革新」『漁業と漁協』通巻578号、2011年、32頁。
- ³³ 中国科学院(青島海洋研究所)「追憶曾呈奎院士 生平介紹 曾呈奎院士生平」(2005年7月)[http://www.cas.cn/zt/jzt/yszt/zyzckys/spjs/200507/t20050719_2671369.shtml] (2012年6月29日閲覧)。
- ³⁴ C. K. Tseng, "Utilization of seaweeds," *The Scientific Monthly* 59, 1944, pp.43-44. C. K. Tseng, "Economic seaweeds of Kwangtung Province, S. China," *Lingnan Science Journal* 14, n. 1, 1935, p. 94.
- ³⁵ Peter Neushul and Zuoyue Wang, "Between the Devil and the Deep Sea: C. K. Tseng, Mariculture, and the Politics of Science in Modern China," *Isis* (The University of Chicago Press) , 2000, Vol. 91, Issue 1, pp. 62-63, pp. 77-78.
- ³⁶ 神長「コンブの旅」133頁。
- ³⁷ Neushul and Wang, "Between the Devil and the Deep Sea" , pp. 81-86.
- ³⁸ Tien-Hsi Cheng, "Production of kelp - A major aspect of China's exploitation of the sea," *Economic Botany* 23, 1969, p. 215, p. 221.
- ³⁹ 江南「中国昆布養殖業の展開と経営革新」32頁。
- ⁴⁰ 酒井直樹「ナショナル・ヒストリーを学び捨てる — 誰が誰に向かって歴史を語るのか『歴史の描き方 1 ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会、2006年、v-xxviii頁。

